

誤解ごかいしているみなさんへ

竹本有希あき

私たちに向かって「たいへんねえ」という言葉をよく言う人がいるけれど、その言葉はどういう意味でしょうか。それは誤解ごかいです。私は生まれたときからずっと車いすだけど、別にたいへんだと感じたことがありません。これがごくあたり前のことだから。私からみれば、毎日歩いてばかりで、階段を上ったり、健常者けんじょうしゃの人は疲れるだろうなと思います。でも、みなさんはそれがたいへんだとは思わないはずです。本当にあたり前のことだから。

私たちは足が動かないとか、手が不自由だとかはけっしてうらんだりしていません。むしろ、この体とどう生きていこうか前向きに考えています。だから「かわいそう」などいう言葉も言ってほしくありません。そして「障害者しょうがいしゃなのにできた」とか「障害者しょうがいしゃのくせにがんばっている」だとかいうのもいやです。「なのに」とかいう言葉は絶対使ってほしくありません。自分が言われていると思えば分かるはずです。

普通ふつう中学校の男の子が障害者しょうがいしゃの作文を読んで、「障害者しょうがいしゃの人はりっぱな心を持っている」と感想文を書きました。私はその感想文を見て、「それはぜったいちがう！」と思いました。りっぱな心なんて私にはありません。ただ、体の不自由な分だけ、どこかでカバーできたらと思っっています。そして、この人は作文の最後に「五体満足に生んでくれてありがとうと母に言いたい」と書いていました。私はともかなしかったです。どうして「障害者しょうがいしゃじゃなくてよかった」などという感想しか持てなかったのか。もっと別のことを感じてほしかったと思いました。

健常者けんじょうしゃの人は私たちの生活の中で苦勞することだとか、そればかりしか見ようとしなくて、障害者しょうがいしゃでない自分をうれしく思うのでしょうか。私は、もっと別のことを健常者けんじょうしゃの人たちに考えてもらいたいです。

たとえば、デパートで障害者しょうがいしゃを見かけたとき、どういう態度をするのか。多くの人はじろじろ見ます。その目はとても私たちをきずつけます。めずらしいのもわかるし、健常者けんじょうしゃの人たちと明らかにちがうから見たくもなると思うけれど、見られた方は何とも言えないきんちよう感と、反感と、



何よりすごいいやな気持ちになります。「おまえは障害者だ」と言われるのと同じように感じます。

もし、私たちを見かけたら特別な目で見ないでほしいです。普通どおり接してほしいんです。

そして、子どもが障害者を見て「どうして歩けないの?」「これ何?」って聞いた時、かならずその親は子どもを私たちが見えない所に連れて行ってそっと教えているようです。本当に二、三才の小さい子だったらしかたないと思うけれど、どうして日頃から教えてあげないのでしょいか。それは、きつと自分の家は関係ないと思っていたり、親も障害者のことを知らなかったり、まちがったイメージを持っていたりしてるからだと思います。障害者の存在すら教えていない、それは何より失礼なことだと思います。

だから、私が今まで会った人、これから会う人にはちゃんと私から教えてあげたいと思います。おとも、子どもにも障害者のことを教えてあげられる人になってほしいです。

障害者も同じ人間です。対等なんです。私はそう呼びかけるのが内心、なぜか少し怖いんです。でも、みんなに分かってもらいたいこといっぱいあるから、もうちょっと強くなって話しじょうずになって、たくさん呼びかけられるようになります。だから、呼びかけたら、多くの人から声が返ってくるよう願っています。そうすれば、いつのまにか誤解がなくなり差別が少なくなると思います。

誤解しているみなさんへ（小学校高学年向け）

A 教材設定の意図

私たちは、障害を持つことを不幸だと考えることが多く、そのため障害者を、同情したり一方的に手助けしたりする対象と見てしまう。しかし障害を持つ人たちは、決して障害そのものを不幸と考え、悲観的に生きているわけではない。有希（あき）さんは、不自由な体をマイナスととらえず、むしろこの体どう生きようか前向きに考えている。そして、同情や遠慮によって健常者が自分たちとの間にどんな壁をつくっていかくことを感じる中で、自分がもう少し強くなりたくさん呼びかけることで、健常者の障害者に対して持つ誤解がなくなり、差別がなくなつてほしいと訴えている。

この教材は、そうした誤解についてストレートに書かれており、子どもたちにとつてわかりやすい。わかりやすいがゆえに観念的・道徳的にとらえられがちであるが、子どもたちの中にひそんでいる差別意識に気づかせることによつて、障害者に対する差別の問題とだけ考えず、教室でつらい状況を抱えている子の問題にまで普遍化したい。そして、そうした不安や課題を持つている子どもが励まされ、自分の生活を振り返り、自分から語つていけるようになればと願う。

B 教材の解説

この作文を書いた有希さんは、当時県立養護学校の中学部三年生で、絵を描くのが得意で、プリクラをしたりCDを聞いたりするのも大好きな女の子である。また生まれつきの障害のため電動車いすでの移動以外、日常生活のほとんどに介助を必要としていた。

この作文は、彼女のクラスで一年間を通して行われた人権学習の総決算として書かれたものである。障害者は必ずしもいつも被差別の側にいるとは限らない。きちんとした人権意識を持たないと、自分たちが差別されていることを見抜けないばかりか、人が差別されていることに気づかず、さらに自分自身が人を差別する側にまわつてしまうこともあり得る。そういう意味で、人権学習は重要であり、常に自分たちの問題として返されていかなければならない。

彼女のクラスでは一学期は「ハンセン病と差別」、二学期は「部落問題学習」の授業が組まれた。これらの授業により、差別の問題を自分たちの置かれている状況と重ね合わせながら真正面から考えるようになってくる。そして三学期の「障害者と差別」の授業を通して有希さんは、障害者と健常者の間にある差別の壁を取り払うために、しっかりと自分の思いを語るまでにいたる。それは同時に、不安でいっぱい普通高校への進学に勇気を与えるものでもあった。

普通高校で大好きな絵を学んでいる有希さんは、呼びかける

ことに怖さを感じながらも、そこから一歩踏みだそうと決意したとおり、そこでもまわりの生徒達に向けて次のようなメッセージを語っている。

私は不安でした。なぜなら、この高校で車椅子に乗っているのは、私一人だから。

私は小学校一年から中学校三年まで九年間、野々市町の養護学校にいました。毎日、障害者と理解ある先生方に囲まれて不安を感じることはめつたになかったと思います。野々市町には三〇年ほど前から養護学校があり、運動会や文化祭のとき、一般参加を実施したり、養護学校の生徒が町内の小中学校へ学習交流に行ったりと、お互い積極的に交流しています。そうしていると、障害者とも近くなつてじろじろ見たりすることが少なくなります。おかげで、私も人の目を気にせずにいられるし、友だちも増えました。しかし、一歩他の町へ出てみると、私を見る目は冷たいです。珍しいものを見つけたとじろじろ見ます。そして、よく「かわいそう」「たいへんやね」と同情されます。私たち障害者はそれがいちばんいやです。同情されるということは、つまり差別されていると感じるからです。同情する方はそんなつもりじゃなくても。(後略)

C 指導上の留意点

- ① 障害を持つ者が、有希さんのように自分の障害を恨んだり

せず、前向きに生きていこうとする者ばかりとは限らない。そのため、障害児学校・障害児学級やクラスに障害を持つ子がいる場合は、その子の生活や障害に対する思いを考慮した指導を考えてほしい。

② 障害を持つ子がクラスにいる場合は、まわりにいる子どもとその子のつき合いを豊かにするという方向で取り組んでほしい。

D 参考

・第十三回北陸同和教育講座地元報告

「生き方を定めて進路を決める」人権学習を通して」

松田 昇(石川県立養護学校：当時)

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>① 町で車いすに乗っている人を見かけたことはありませんか。そのとき、どう思いましたか。</p> <p>二 展開</p> <p>② 「誤解しているみなさんへ」を読みましよう。</p> <p>③ 有希さんは、障害者としてどんなふうに見られることがいやだと思っていますか。</p> <p>④ 同情されていやな思いをしたことはありませんか。そのとき、同情ではなくてどうしてほしいと思いませんか。</p> <p>⑤ 「〇〇なのに」とか「〇〇のくせに」と言ったり、言われたりしたことはありませんか。</p>	<p>① 各自の体験から障害者に対して持っているイメージを正直に話せる。</p> <p>② 有希さんについては、障害者だという説明だけに終わらず、生活全般を補足する。</p> <p>③ 「かわいそう」とか「大変ねえ」という同情。「障害者なのに」とか「障害者のくせに」という言葉。障害者はみな立派な考えを持っているという見方。デパートなどでじろじろ見られること。どれも、障害を持つ人に対し一歩距離をおいた見方であり、生活の中の苦勞する部分しか見ていない見方であることをおさえる。</p> <p>④ 有希さんがどうして同情されることがいやなのかを、それぞれの子どもの経験と重ね合わせて考える。</p> <p>⑤ 「〇〇なのに」とか「〇〇のくせに」という言葉が、相手を差別する言葉であることに気づかせる。</p>

そのとき、どう思いましたか。

三 まとめ

⑥ 今まで誤解していたと気づいたことは何ですか。今日の授業の中で思ったことを書きましよう。

④⑤の展開をふまえ、障害者に対する誤解だけでなく、友達との関係の中で人を傷つけてこなかったか振り返らせる。

本教材を使った授業から

◆ これまでにも道徳や学活で障害者について話し合ってきた。そのときの感想に必ず自分に満足しているとか、同情的な表現が出てきてその処理に困っていた。この教材を読みきかせるうちに教室がしーんと静まり、子どもたちの心の中に強く訴えるものがあった。自分の間違いに気づいたことで少し、障害者に対する意識をかえることができたと思う。(加賀江沼)

◆ 以前、障害を持つ人が書いた詩集「さびしいときは心のかげです」を全員で読みあつたとき「障害があるのにこんな詩が書けるなんてすごい」と感想を持つ子が多かった。「くなのに」というのは障害者にとつてどんな意味を持つのか、障害者からの思いを伝えるのに適切な教材だと思った。子どもたちが障害を持つ人が書いた文を読むのはおそらく初めてだったと思う。とても素直に書かれていてよかった。子どもたちは授業の感想を書いてもらうとき、特に言葉かけはしなかったのだが、学級内でときどきつらい思いをしている子は自分の体験と有希さん

の思いをつなげて書いてあった。障害者に対する今までの自分の態度を変えていきたいと書いた児童も多かったが、実際障害者と出会ったとき、有希さんの思いをチラツツと思いだしてくればいいなと思う。(能美)

◆ 「誤解しているみなさんへ」という文を書いた有希さんは、自分一人では何もできないけど、他の障害者といっしょに少しずつ呼びかけていきたい気持ちがあるんだとわかりました。わたしも障害者の一人です。自分が耳に付けている補聴器を外して聞こえる練習をしています。あまり聞こえませんが。(中略)どこかの学校に、障害者のない学校があるのかもしれない。そんな学校だったら、障害者のことはあまりわからないのかもしれない。障害者をバカと思わないでほしいです。「大変ねえ」という言葉は、何の意味があつて言ってくれているのか、教えてほしいと思つています。(石川)